

## 指定討論

野々山久也

私の専門は社会学です。社会学の中でも家族の研究、家族社会学をやっております。それぞれ全部にコメントをということになると、私も限界がありますので、高石先生が話されました「子育ての困難」とつながりのある辺りを中心に話しようと思います。

最初に港道先生が、汎通的、あるいは横割的という言葉を使いながら仰ったように、ここは人間を科学する研究所ですから、臨床心理的な問題だけではなくて、いろんな分野から問いを立て追究していく所だと理解しています。ですから、大きな問いを立ててほしいと思います。テーマの中心には「臨床の知」が掲げられていますが、社会福祉などでいくと「福祉実践の知」もあります。それから私は、社会調査ということをやっておりますので、かなり現場に入り込んでいろんな調査をやりますので、「フィールドワークの知」もあります。そういうものも含めての「臨床の知」を追究していただきたいと思っています。

昨年、児童虐待問題で国会にも出ていつて参考人になられるくらいの著名な方ばかりをお呼びして、姫路市で育児不安

のシンポジウムを開催しました。私が司会をしました。これも「臨床の知」といいますか、「臨床の場」といえるかと思えます。そのシンポジウムの質疑応答で、フロアの前列の方で年輩の方が手を挙げられまして、「うちの娘が、今、児童虐待をし始めてるんだけど、どうしたらいいでしょうか」と質問されました。そこで精神科のお医者さんに答えていただきました。お名前は挙げませんが、ある大学の先生です。その先生はこう仰るんですね。「あ、そうですね、それはですね。

リンとか センという薬が現在発明されてまして、それさえ飲んでいただければ……」と。私、司会者としてどうしようかと思いましたが。その質問した方が立ち上がって「納得いきません」と大声で仰った。そしたら、みんな一斉に「納得いきません」というざわめきになりました。当然ですね。私としては司会者を降りたいな、何でもこんな司会を引き受けちゃったのかなと耐えられない状況になって、とりあえずまとはしたんですが……。このあとの話はやめておきます。

ただ一言だけいっておきますと、何とかリンとか何とかセン：よく覚えていませんが、そんなもので回答していただきたくない。その時、このシンポジウムに経済学者がいたらよかったなと思いました。というのは、児童虐待の基本的な原因について、たとえば、かつて母親に虐待されていてトラウマを有しているとか、義理の親子関係にあるとか、二人目の子どもが生まれたとか、いろんなデータを出してきています。いろいろな見ていくと根本的な要因は「貧困」なんです。なかには豊かな人で虐待する人もいますが、データから申し

ますと、一番大きな要因は「貧困」なんです。ですから、私は児童虐待を経済学からのもっとと研究するべきだと思うんです。この問題に経済学者がどこまで入り込めるか。もし入り込めなかったら、経済学が遅れているのです。現代の知を持つてないのです。

それでは社会学の方はどう入り込めるか。私が行なった範囲でいいますと、今年に入ってから、六歳未満の子どものいる夫婦の調査を実施しました。夫にも妻にも聞いています。保育所や幼稚園および健診の場で三〇〇組あまり調査票を配布しました。そのうち五〇パーセントほど返ってきました、すなわち約一五〇〇組のデータが回収できました。その調査では、今まで言われているように、働いている人よりも専業主婦の方にやや育児不安が多いという結果が出ていますが、それよりも因子分析を行なってみますと、育児不安の要因としてもっと大事なことが見えてきました。一つ目は夫とのコミュニケーションが取れていないということ。夫の子育て観とのバランスの問題ですね。二つ目は自分の自由時間を持つ余裕がないと感じていること。その度合いです。それから三つ目は、子育ては完璧でなくてはならないと感じていること。これには現代社会が大きな影響を与えています。特に臨床心理学のネガティブな影響が大きいですね。たとえばベアレンディング<sup>ベアレンディング</sup>などという言葉は、どういうふうにも母親たちには響いているんでしょうか。少なくとも分析の結果では、この三つが大きなファクターだということが明らかになっています。しかしさらにその背景は何かというところ、母親だけが子育て

をしなければならぬ現代の状況があるんですね。それは先ほど高石先生が仰ったとおりです。子どもが、かつてのようにつながりある家族の中で出産されなくなっています。陣痛が起これば、すぐ病院に行つて分娩台に寝かされ、そして出産後はすぐさま子どもと離されて……といったことに始まるいろんな近代化のひずみ、つまり家族の支援が薄い育児状況が、データからも浮かんできました。

一方、現代ほど核家族に育児機能を委ねている時代はありません。これまでそういう時代は一度もありませんでした。「育児」という言葉が登場したのは戦後の高度経済成長期です。それまでは「子守り」という言葉を使っていました。たとえば戦前の農村部などで母親に、「子どもを育てている人は誰か」と訊くと、「お義母<sup>かみ</sup>さんです」と答える人が多かったのです。つまり大抵の場合、自分の夫の母親が育てているわけです。その人たちは、早くから嫁いできて地域に根付いています。地域全体で子どもや孫を守る、「子守り」という言い方で育てていました。これが戦後になってからは「育児」ですね。今の日本社会では、夫が働きに出ているケースが多いですから、育児が妻一人に行つてしまふ、母一人にその責任が行つてしまふ。つまり一人で子どもを育てるのは大変ですから、問題が起これるのは当たり前です。これが決定的な背景で、ここに申し上げた三つの点。夫とのコミュニケーションと自由時間と子育ての完璧主義。こういふ問題点が生じているんです。したがって、この双方を論じていかなければいけないと思います。

さて、人間科学研究所が何を研究するかということをも、ずつと論じてきているんですが、人間科学研究所が研究する「人間」というのは、文学部の人間科学科がカバーしている範囲に収まるような「人間」でないということです。だから経済学とか社会学などの知が求められているということです。それでは人間って何なのか、人間の研究って何なのかという問題が出てきます。よく「人間の回復<sup>ヒューマニティ</sup>」などといいますが、非常に居心地が悪いというか、耳障りです。世界的に共通した、普遍的な人間性<sup>ヒューマニティ</sup>といったものはなくて、非常に文化的な偏向とか違いがあるんじゃないかと、私は思うんですね。たとえば震災が起こったときに日本人はどう生きるかということとを、ヨーロッパの文化を入れて理解しようと思うと難しいですね。ですから、人間性<sup>ヒューマニティ</sup>を回復することではなく、その「性」をはずした人間回復ということになってくると思います。ここでもそういう研究をやっていたらいいと思います。

先ほど横山先生がグローバリゼーション、アメリカナイズーションの問題について話されましたが、今まさに、それに対して日本が日本を研究しなければいけないと思います。それは、また斧谷先生が青春を過ごした頃に目に見えていた日本らしさみたいなものですね。そういう意味でグローバルというよりも「グローバル」と「ローカル」をくつつけて「グローカル」、「グローカリゼーション」に対応できる日本の文化、日本の研究をやらなければいけないと思います。日本の人間研究をやらなきゃいけないということです。単なる人間性<sup>ヒューマニティ</sup>の研究では仕方ないと言いたいですね。

そこで日本人、日本人らしさとは何なのかということに、私は文化的というよりは美的という言葉で考えています。たとえば九鬼周造<sup>3</sup>が「いき」の三番目の要素として「諦め」をあげています。「諦め」というのは、たとえば大きな政治体制の中で諦めるということもあるし、人間って小さなものだから諦めるということもあるし、自然の力に対して諦めるということもあるでしょう。戦後になって日本人は自然に対して「畏敬の念」を失ったとか盛んに言われていますが、私は日本の文化にそんなものはないと思うんですよ。九鬼も「諦め」ということで「畏敬の念」とか「見えない世界に襟を正す」というようなことは全く言っていない。それは非常にヨーロッパ的だと思うんですね。私自身は「諦め」というのは「のびのびとした無頓着さ」ではないかと考えています。「のびのびとした無頓着さ」、それが日本的な美ではないか、つまりそれが「もののあわれ」を感じる心ではないかと。そのあたり、「幽玄」の概念や、いま申し上げました「いき」の概念、または「しおり」の概念を、どういうふうにグローカルにジャポノロジーとして出しているか、そういう日本人としての人間研究をやらなきゃいけない、また甲南大学だからこそやらないといけないと思っています。

# 註

- (1) 日本語では「親業」、「子育て業」などと訳される。
- (2) 「いき」という概念で日本人を論じ、『いきの構造』を著した。甲南大学に九鬼周造の草稿が多く揃っている。

(3) 蕉風俳諧の根本理念の一つ。作者の心にある哀感が、自然にあらわれること。

---